６月１日（日）マルコの福音書４章３３，３４節
「イエスは、このような多くのたとえをもって、彼らの聞く力に応じてみことばを話された。」

３３節は、２節に呼応していると考えられます。つまり２節からイエスは神の国について例えで話され、３３節は、その締めくくりと言えます。「彼らの聞く力に応じてみことばを話された」とは、イエス様がみことばを語ることを大切にしておられたことを表していますが、しかしただ語ればいいということではなく、聞く力がどの程度かイエス様が知っておられて、その聞く力に応じて語られるイエス様の細やかな配慮を見ることができます。３４節で「たとえを使わずに話されることはなかった」とあり、イエス様は訓戒をしたり、直接たとえを使わずに教えられたこがあったはずだと反論する人もありますが、恐らくここでマルコが言っているのは、聞く力に応じてイエス様が話された時には、どうしてもたとえを用いることになったことを言おうとしているのでしょう。つまり、聞く力に応じて話される＝たとえということだったのだろうと思われます。その一方で、「ご自分の弟子たちには、彼らだけがいるときに、すべてのことを解き明かされた」とあります。これは１１～３２節の神の国の奥義の解き明かしのことを言おうとしているのだろうと思われます。つまり、奥義とは隠されているもののことですから、聞く力のない者に対しては語られることはありませんでしたが、弟子たちには本来隠されるべき奥義までもイエス様は知らせたのです。

イエス様は、今もみことばを通して私たちに懇ろに語ってくださっています。そして、みことばは、主が許される範囲においてのみ奥義に至るまで明らかにしてくださっています。問題は、「聞く耳のある者は聞きなさい。」（９節）「聞く耳があるなら、聞きなさい。」とイエス様が言われたように、私たちに聞く耳があるかどうかです。私たちは聞く耳を持って常にみことばを聞いているでしょうか。

６月２日（月）マルコの福音書４章３５～４１節
　イエスは彼らに言われた。「どうしてそんなにこわがるのです。信仰がないのはどうしたことです。」（４０節）

　夕方になってイエス様が弟子たちと向こう岸へ渡ろうとした時に、激しい突風が起こりました。ガリラヤ湖は、びわ湖の四分の一程度の大きさですが、地中海の海面よりも２１０メートルも低く、周囲は５００～６００メートルの山や高地に囲まれている、すり鉢状の地形でした。ですからこのような突風が突然起こるのは決してめずらしいことではなかったようですし、山からの冷たい風が吹きおろして、湖上の温かい空気とぶつかって激しい気流の変化が起り、２メートル以上の大きな波を作ることがあったようです。ですから、弟子たちの中には漁師もいたわけですから、ガリラヤ湖の大波には慣れていたとは思いますが、その彼らが恐れるほどですから、かなり大きな波だったのだろうと思われます。
　激しい突風によって舟は波をかぶって、水でいっぱいになり沈みそうになりました。彼らはイエス様に対して「先生。私たちがおぼれて死にそうでも、何とも思われないのですか。」と言いました。恐らくイエス様が弟子たちとともに沈みそうになっている船を何とかしようとするでもなく、とものほうで、枕をして眠っておられたからでしょう。イエス様は起き上がって、風をしかりつけ、湖に「黙れ。静まれ。」と言われると、風はやみ、大なぎとなりました。イエス様は、神の御子なので風をしかりつけて従わせることができたのです。このようにしてイエスは、ご自分が神であることをお示しになりました。イエスが神であることを信じられなかった弟子たちは、イエスが風をやませたことを恐れて、「風や湖までもが言うことを聞くとは、いったいこの方はどなたなのだろうか」と互いに言い合ったのです。
　イエス様は「どうしてそんなにこわがるのです。信仰がないのはどうしたことです。」と言われましたが、結局弟子たちの恐れはイエス様がどのようなお方か十分に理解できていないところから来ていたものでした。もし私たちがイエス様がどのようなお方であるかを理解し、そして信じることができたならば、たとえどんなことが起こったとしても決して恐れることはないでしょう。私たちはイエス様に対する信仰を強くしていただいて、決してイエス様から「どうしてそんなにこわがるのです。信仰がないのはどうしたことです。」と言われないようにいたしましょう。

６月３日（火）マルコの福音書５章１～１３節

「イエスはそれを許された。そこで、汚れた霊どもは出て行って豚に入った。すると、二千匹ほどの豚の群れが崖を下って湖へなだれ込み、その湖でおぼれて死んだ。」（１３節）

イエス様が波を鎮められたので、一行は無事ゲラサ人の地に着きました。そして彼らを迎えたのは汚れた霊につかれた人でした。この人の特徴としては、墓場に住みついていたこと、足かせや鎖でつないでいても誰も彼を縛っておくことができなかったこと、そして夜も昼も墓場や山で叫び続け、石で自分のからだを傷つけていたということでした。ところが、この人がイエスによって悪霊を追い出していただき、服を着て正気に返って座っているのを人々は見ました。まずイエスは、人がどうすることもできないことを成し遂げることのできる、人間よりもはるかに力のあるお方です。二つ目がイエスは、「汚れた霊よ、この人から出て行け」と命じる権威を持っているお方だということです。実際に、この汚れた霊がイエスに豚に乗り移ることを願って、それが許されると、二千匹ほどの豚の群れが険しいがけを駆け降りて湖になだれ落ちて死んでしまいました。つまり、この人に取りついていた汚れた霊にはこれほどの力があったということです。しかし、イエスは、それにまさる力を持ち、みこころであれば、これらの霊を滅ぼすこともできる力を持っていたということです。三つ目が、もしこの人がイエスに出会ってなかったら、恐らくこのままの状態だったことでしょうし、人としての尊厳をなくしたまま生きなければならなかったことでしょう。イエス様は人を全く新しく造り変えてくださるお方です。この人のようにイエスに出会って、新しい人生を歩み出す人が起こされるように私たちも祈ってまいりましょう。

6月4日（水）マルコの福音書5章14～17節
「すると人々はイエスに、この地方から出て行ってほしいと懇願した。」（17節）

１５節を見ますと、悪霊につかれていた人が服を着て、正気に返って座っているのを見て、人々は恐ろしくなりました。人々が恐れをいだいた理由はよく分かりませんが、一つの可能性として、３章２２節で律法学者たちがイエス様に対して、「彼はベルゼブルにつかれている」とか「悪霊どものかしらによって悪霊を追い出している」と言いましたが、もしかすると、人々もイエス様に対してそのように考えたのかもしれません。また別の学者は、二千匹の豚を失うとの経済的損失を被ったので、これ以上の損失を出したくないと思い、イエスにこの地方から出て行ってほしいと懇願したと説明します。いずれにいたしましても、本来であれば、悪霊につかれた人がいやされたことをともに喜ぶべきです。しかし、人々はいやされた人には全く無関心で、とにかく自分たちのところから出て行くように懇願したのです。私たちとイエス様との関係も、このような損得勘定になってしまってはいないでしょうか。自分のために、何もしてくださらないイエス様は、自分にとって意味がないとばかりに、どこか冷めた信仰になってはいないでしょうか。特に自分の益のためにイエス様がどれだけみわざをなしてくださるのか期待するだけで、他の人のために、また教会のためにイエス様がみわざをなしてくださることを私たちは期待して祈っているでしょうか。またイエス様がなしてくださったみわざを私たちはともに心から喜び、主をほめたたえているでしょうか。自己中心な信仰から他の人のことを顧みる信仰へと転換させていただきましょう。

６月５日（木）マルコの福音書５章１８～２０節
「あなたの家、あなたの家族のところに帰りなさい。そして、主があなたに、どんなに大きなことをしてくださったか、どんなにあわれんでくださったかを知らせなさい。」

人々はイエスにこの地方から出て行ってほしいと懇願しましたが、悪霊につかれていた人はお供をさせてほしいとイエスに願いました。彼は、悪霊によって縛りつけられていた人生から解放され、全く新しい人生を歩み出すことができることの感謝をもってイエスにそのように願い出たのでしょう。正気に返ったのをいいことに、イエスを離れて自分が好きなように生きるということは彼にとっては考えられないことだったはずです。信じたことによって、全く新しい人生を歩み出した私たちは、その感謝をイエス様にどのようなかたちで現しているでしょうか。イエスに従うことによって私たちは、救いの感謝をイエスにささげたいと思わされます。

イエス様は彼の献身の思いをしっかりと受け取られた上で、彼にしかできない使命を与えられます。それは、彼が家族のところへ戻り、主がどんなに大きなことをしてくださったか、どんなにあわれんでくださったかを知らせるということでした。イエスのみわざにあずかった者は、次に自分の家族のことを考えるべきです。これがイエス様のみこころです。イエス様は、何か神学について論じるようにということではなく、主のみわざや恵みを知らせるようにと言われました。これは誰にでもできることです。また家族への証しが一番難しいと言われていますが、主のみわざを証しする機会を主が与えてくださるように、また主が家族の心を開いてくださるように熱心に祈りましょう。

悪霊につかれていた人は、イエス様が言われたとおりに、イエス様のもとを立ち去り、イエスが自分にどれほど大きなことをしてくださったかを自分の家族だけではなく、デカポリス地方で言い広め始めました。彼は忠実にイエスによって命じられた務めを果したのです。そして、イエスは、恐らく自分がこれ以上ゲラサ人の地で宣教を行うことは不可能であると判断して、ゲラサ人の地での宣教をこの人に託されたのでしょう。私たちを通して福音が伝えられべき家族、地域や職場、学校の友人たちがいます。その人たちに私たちも、イエスがどんなに大きなことをし、どんなにあわれんでくださったか知らせ、人々をイエスのもとに導く使命を果したいと思わされます。

６月６日（金）マルコの福音書５章２１～２４節
「すると、会堂司の一人でヤイロという人が来て、イエスを見ると、その足もとにひれ伏してこう懇願した。」（２２，２３節）

イエスが再び舟で向こう岸に渡られると、大勢の群衆がみもとに集まって来ました。すると、そこにヤイロという会堂司がやって来ました。会堂司とは、会堂を管理し、礼拝全般に対して責任を持つ人のことで、人々から尊敬され、名誉ある務めを担っていました。自分の娘が死にかけている状態にあっては、自分の立場など一切関係なかったということでしょう。死にかけている自分の娘を生かすために来て、彼女の上に手を置いてやってくださいとイエスの足もとにひれ伏し、懇願しました。

ヤイロにとっては苦しい経験であり、親であれば自分の娘が死にそうな状況に置かれているのを見ることはこれ以上ないつらい経験だったはずです。しかし、自分の大切な娘が死にそうになっているという状況が、ヤイロをイエスのもとへ行かせ、イエスの足もとにひざまずかせたのです。イエス様も、あえて人に苦しく、つらい中を通されることがあります。そのようなつらい経験を通してイエス様に出会う人があり、そうであればつらいことも恵みに変えられます。また私たちクリスチャンに対しても、「なぜ自分がこのような目にあわなければならないのか」と思うようなつらい試練の中を通されることがあります。しかし、それはイエスのみもとに行こうとしない頑なな私たちがイエス様の御前にひれ伏させるためでもあるように思います。そのようにして無理やり引きずり出されるように御前に出た者であっても、決してイエス様は捨てることなく、慰め、励まし、みこころのままに、祈りによってみわざをなしてくださいます。そのようにして御前に出ることによって知ることのできる恵みもあることをいつも思わされます。主は、私たち一人一人のことをよく知ってくださった上で、必ず最善をなしてくださるお方です。

６月７日（土）マルコの福音書５章２５～３４

「娘よ。あなたの信仰があなたを救ったのです。安心して行きなさい。苦しむことなく、健やかでいなさい。」（３４節）

２５節で十二年の間、長血をわずらっている女の記事が出てまいります。当然この女も何とかして病をいやそうとしたのでしょう。多くの医者を訪れましたが、ひどい目にあわされ、かえって「自分の持っている物をすべて使い果たしましたが」（２６節）何のかいもなく、むしろもっと悪くなっていったのです。さらにレビ記１５：１９～３３を見ますと、当時は出血中の女性は不浄とされ、その使った寝床や椅子も不浄で夕方まで使えず、これに触れた者も夕方まで汚れた者とされていました。ですからこの女は病による苦しみだけではなく、宗教的な汚れ、経済的な窮乏、社会的な孤立という四重の苦しみの中を生きていたのです。このような状況が１２年も続いていました。ですから、この女性の日々感じていた肉体的・精神的苦痛も想像に難くありません。この女性もイエス様のことを耳にして（２７節）「お着物にさわることでもできれば、きっと直る」と考えて（２８節）うしろからそっと群集に紛れるようにイエス様の着物にさわったのです。恐らく先ほど引用しましたレビ記１５章１９～３３節の律法の定めにありますように、回りの人々から不浄の女と思われていたので、面と向かってイエス様に直してくださるように頼むこともできず、ましてやイエス様に触れたり、触れられたりすることはできないとの思いから、そのようにしたのでしょう。

女はすぐに血の源が乾いて、病気が癒されたことを体に感じました。（２９節）するとイエス様はすぐに自分の着物にさわった者を捜し始めたのです。これには二つの理由が考えられます。まず一つがイエス様に対する信仰がいやしをもたらしたことをこの女に確信させるためでした。イエス様は、まず「娘よ」と呼びかけ、この女に対する愛と関心を現します。そして３４節で「あなたの信仰があなたを救ったのです。」と言われました。まさに信仰にこそ力があることをここで強調されたのです。このことは今も決して変わることはありません。信仰が神のみわざを期待させ、信仰によって罪が赦され、信仰によって私たちは大いなる働きをすることができるのです。二つ目が、イエス様はこの女性の病のいやしを公に宣言することで、この女性が社会に復帰できる道を備えられたのです。もしこっそり触って、そのまま帰ってしまったなら、いくらいやされてもこの女性は汚れた女としてずっと生活しなければならなかったのです。恐らくイエス様はそこまで配慮されて、女のいやしを人々に宣言されたのでしょう。そして「苦しむことなく、健やかでいなさい。」とは、イエス様による病からの完全な癒しの宣言と言えます。

この女の信仰が、イエスのうちから力を引き出したのです。（３０節）私たちもイエスのうちからみわざをなす力を引き出し、「あなたの信仰があなたを救ったのです。」とイエス様に言っていただける信仰を持たせていただきたいと思わされます。